



2 花めぐりの推進



庄原市制施行 10周年 記念特集

vol.2

観光振興の10年 — 一次のステージへ —

合併から10年を振り返るシリーズ。
今月は観光振興をテーマに、これまでの取り組みと、これからの展望をお伝えします。



1 着地型観光の推進

**花と緑で観光を牽引してきた
国営備北丘陵公園**

本 市の観光をけん引してきたのが「国営備北丘陵公園」。平成7年にオープンした中国地方唯一の国営公園は、四季折々に美しい花々が咲き誇ります。

約1.5haの「花の広場」、600品種約110万本のスイセンが楽しめる「日本一のスイセンガーデン」など、日本有数の花と緑で、毎年40万人を超える人を呼び込んでいます。今年、節目の20年を迎え、より一層花と緑にこだわ

**さとやま博をきっかけに
体験交流型の観光がスタート**

観 光産業はこの10年で大きく転換しました。それは、観光の主流だった観光地を巡る「見学型」旅行が、地域資源を活用してさまざまな体験をご当地の人と楽しむ「交流型」へと移行したことにあります。

平成22年9月から1年2カ月の間開催された「庄原さとやま博」は、庄原市ならではの地域資源を観光商品化して提供し楽しんでもらう、いわゆる着地型観光を進めた事業

であり、市民にとってもそれまでの観光イメージを変えるきっかけとなった事業です。市民が儲ける仕組みづくりの一步として、市民自らが企画した身近にある資源や特技などを生かした体験メニューを提供。新たな庄原市の楽しみ方を市内外に発信しました。

提供されるメニューは都市部では普段体験できないものとなっており、参加者からは喜びの声が多く寄せられ、また単にメニューを体験するというだけでなく、主催者との会話・触れ合い・交流が参加者の心をつかみ、リピーターの獲得、庄原ファンの獲得にもつながっています。

体験型教育旅行の誘致へ

こ うした観光資源として人気が高まっている体験メニューを素材にしながら、食事や宿泊を絡めた「民泊」に注目が集まっています。

泊がつくことで地域により多くの観光消費をもたらされ、地域経済への波及効果も期待できます。そして何より受け入れ家庭の生きがい、地域の元気づくり役に立ち、地域振

たさまざまな仕掛けで来園者を楽しませています。

**市内全体へと広がりを見せる
花と緑のまちづくり**

一方で、市内に足を運ぶ人が少ないことから、花と緑をテーマに公園と市街地を回遊する仕組みづくりが進められました。それがきっかけとして誕生したのが、「庄原さとやまオープンガーデン」です。個人の庭を一般公開するこの取り組みは、当初から大きな反響を呼び、現在も多くの人を引き付けています。11庭（平成23年春）の参加だったものが、今春は38庭（事業者も含む）になりました。

人気の秘訣は、里山を生かしたこだわりの庭づくりと、手入れの素晴らしさに加え、庭主との触れ合いにあります。心通う飾らないもてなしが、来訪者に癒やしと感動を与えています。丘陵公園から市内への人の流れも生まれ、期間中はバスツアーの団体が訪れるなど、市内の経済効果、にぎわい創出、庄原ファンの増加に大きく貢献しています。

主催する「しよばら花会

興策として成果を上げているまちもあります。

また近年、子どもたちのコミュニケーション能力向上と健全な成長を図るため、全国的に農村で民泊体験を取り入れる学校が増えています。観光地を見てまわっていた修学旅行も、昨今は「民泊体験旅行」に変わりつつあります。

市は今後、この民泊に取り組み家庭を増やし、全国的にも増えている修学旅行生を受け入れる「体験型教育旅行」の誘致を目指します。



庄原市観光協会
専務理事
坂田 忠則 さん

これからの観光は体験交流型が主流です。体験メニューを含めた滞在プログラムを積極的に推進していきたいと考えています。

現在、当協会として旅行業の登録申請を行っています。これまでは市内の観光スポットや体験メニューといった地域資源を紹介し、旅行会社にツアーを組んでもらったり、来訪を呼びかけたりすることはできず、ツアーを自ら企画・実施することができませんでした。しかし、旅行業登録によって、旅行を商品として売り出すことが可能になります。登録種別により一定の制限はありますが、庄原市ならではの資源・人材、ネットワークなど地元の強みを生かし、ほかにはないより魅力ある商品を提供していきたいです。

今、日本に訪れる外国人観光客数が伸びていて、中でも農村での体験交流の人気が高まっていますので、そうした外国人向けの訪日旅行の呼び水にもしたいですし、庄原を訪れる人を一人でも多く増やしていきたいと考えています。



庄原観光いちばん協議会
花と緑のまちづくり部会部会長
齊木 義伸 さん

さとやまオープンガーデンが定着し、多くのお客さまに来ていただいています。庄原市は四季を通じて花が楽しめますので、点在する桜や山野草などとオープンガーデンをうまく組み合わせ、より多くの人に市内を周遊していただけるような仕掛けを考えていく必要があります。現在のオープンガーデンのパンフレットでは、そのあたりの情報が不足していますので、ガイドブックを充実させて、花をめぐるとその沿線にある飲食店やスポット、花の楽しみ方を提供し、長く滞在してもらえるような工夫が必要です。

そして何より、花によるまちづくりがもっと進むことが必要です。花は種をまかなければ咲きません。将来大きな花が咲くように、われわれがしっかりと種をまかなければいけない。花と触れ合う楽しさ、魅力を子どもたちや地域の皆さんに伝える活動を継続的に取り組むこと、自分たちが楽しみながらやるのが大切だと思います。

**都会の子どもたちを受け入れて7年
白幡憲壮さん・節子さん(比和町)**



民泊は特別なことをする必要はありません。草刈り、布団を敷く、料理を作るといった経験の無い子どもたちが多く、私たちの普通の生活を一緒にするだけで、子どもたちは生き生きと過ごしてくれます。それが喜びですし、私たちの元気の素です。

**オープンガーデンに参加して3年目
明賀誠さん・裕子さん(西城町)**



自分たちが好きなことをして、それが多くの方に喜ばれる、こんなにうれしいことはありません。いろいろな方と出会えましたし、毎回それが楽しみになっています。手紙をいただくこともあり、とても励みになっています。参加して本当に良かったです。



商工観光課
寺元豊樹 課長

誰もが訪れて感動する観光地庄原を目指します

庄原市への入り込み観光客数は平成18年度の271万5千人をピークに、景気の後退とともに24年度の227万1千人まで減少し、これに比例して観光消費額も約60億円から約39億円に減少しました。

25年度は一変して271万2千人に増加し、18年度とほぼ同じ水準まで回復しました。この主な要因はオープンガーデンなど新たな観光資源が庄原の魅力を高めたことや、中国横断自動車道松江道の開通と「道の駅たかの」のオープンが大きく寄与したと考えます。

一方、観光消費額は25年度約42億円で、平成18年度から8%程度しか回復しておらず、市内での観光消費を促すことが課題となっています。

こうした課題や観光を取り巻く変化を踏まえ、25年度には庄原市観光振興計画を策定し、「さとやま遊びで感動を生む観光地域づくり」を基本コンセプトに、「さとやま体験をする人が増える」「花と縁、山を楽しむ人が増える」「自慢の食・特産品が増える」「情報発信力が高まる」を将来像として施策を展開しています。

特に、入り込み観光客数と観光消費を促すために、体験メニューのブラッシュアップや修学旅行の受け入れなどの着地型観光の促進と、花めぐり、温泉めぐり、山めぐりなど市内周遊の強化、本市を東西、南北に貫く高速自動車道の沿線観光資源と連携した広域周遊、さらに地域の農産物を活用した加工品づくりやインターネット販売などにも取り組んでいきます。

庄原を訪れた誰もが感動していただける観光地となるよう、関係団体や事業者と一体となって事業を進めていきます。



1_ 国営備北丘陵公園内に世界的ガーデナー石原和幸さんプロデュースの備北緑風庭完成 (H 25.9) / 2_ 比婆・道後・帝釈国定公園指定50年 (H 26.5) / 3_ 庄原さとやま博開幕 (H 22.9) / 4_ 民泊受け入れ家庭 / 5_ 庄原焼き誕生 (H 22.7) / 6_ 庄原さとやまオープンガーデン開催 (H 23.6~) / 7_ カーブ応援隊結成 (H 17.3) / 8_ 松江自動車道開通 (H 25.3)・中国やまなみ街道全線開通 (H 27.3)



3 中国やまなみ街道全通

合併以前から多くの市民が期待を寄せた「中国横断自動車道尾道松江線」の開通。新直轄方式で建設されたこの高速道には、経費削減のためサービスエリアやパーキングエリアが設けられないことから、庄原市は沿線に近い場所にこうした機能をもつ道の駅設置を決め、市内の農産物を直売するための出荷者協議会の立ち上げや、より魅力的な商品で顧客をつかむブランド戦略「高野の逸品

100プロジェクト」の推進など準備を進めてきました。平成25年3月30日、待望の三次東JCT・IC〜吉田掛合IC間(松江自動車道)が開通し、同年4月12日には、多くの市民や関係者の期待を乗せて「道の駅たかの」がブランドオープン。新施設のお披露目というニュースが連日報道され、松江自動車道を通る車は、平日でも一日平均4千900台、休日で7千200台以上と、庄原市の北の玄関口には年間100万人以上が立ち寄り、幸先よいスタートを切りました。

松江自動車道開通 「道の駅たかの」オープン

100プロジェクト」の推進など準備を進めてきました。平成25年3月30日、待望の三次東JCT・IC〜吉田掛合IC間(松江自動車道)が開通し、同年4月12日には、多くの市民や関係者の期待を乗せて「道の駅たかの」がブランドオープン。新施設のお披露目というニュースが連日報道され、松江自動車道を通る車は、平日でも一日平均4千900台、休日で7千200台以上と、庄原市の北の玄関口には年間100万人以上が立ち寄り、幸先よいスタートを切りました。

中国やまなみ街道全線開通を 追い風に

道の駅たかのオープンから2年。市内産品の販売は好調で、高野地域だけでなく市内全域から多くの産品が出荷され、生産者の収入増につながっています。また、インフォメーション機能によるPR効果も高まっており、市内に足を伸ばす人も増え、本市の入り込み観光客増に大きく貢献しています。国が昨年10月に、尾道松江線沿線にある道の駅やサービスエリア、集客施設で立ち寄り行動の調査を行ったところ、第一立ち寄り先に「道の駅たかの」と答えた人の割合が最も多いという興味深いデータが示されました。

今年3月22日には、中国横断自動車道尾道松江線(中国やまなみ街道)が全線開通し、日本海から瀬戸内海、さらには太平洋までがつながり、さらなる地域活性化へ期待と夢が膨らみます。今後このチャンスをしつかりとつかみ、通過点にならない観光客に選ばれるまちになることが、大きく求められます。



道の駅たかの
駅長
根波裕治さん

やまなみ街道の全線開通によって、お客さまの数が目に見えて増えています。ただ、立ち寄る人をターゲットにするのではなく、ここを目的地にしてもらうことがとても大切です。それには庄原産品にとことんこだわり、さらに磨きをかけて、ここから提供できる本物をお届けします。お客さんはいいものはきちんと評価してくださいので、それが当道の駅の、そして庄原市の個性となり、まちの魅力へとつながると思いますし、市内へ人を呼び込む大きなポイントになるのではないのでしょうか。そのためには、出荷者の皆さんの活躍が欠かせません。

現在330を超える方に出荷者会員登録をいただき、その半数近くは高野町外の市内の方で、意欲的に出荷いただいています。おかげさまで売り上げも順調で、入会いただく方もさらに増えています。庄原市の北の玄関口として、求められる役割をしっかりと担いたいと思います。



道の駅たかのへ自家製野菜などを出荷している
久長ムツエさん・上永イツエさん(西城町)

西城町まで出荷品を取りに来てくださいますし、売れ残らないよう工夫して販売していただけるので、返品も少なく本当に助かっています。安心して出荷でき、予想以上に収益もあるので、おかげで元気で楽しく野菜作りができています。

